

久保田容器工業株式会社

Pick Up!

平成25年度

事業計画名

ドラム缶再生設備の能力強化

概 要

再生ドラム缶において、主要用途である食品に対する安全意識の高まりと需要増に対応するためには外観品質の向上が課題となっている。

そこで塗装の前処理に主眼をおいた製造プロセスの再構築を実施し、高品質化を実現し、従来顧客の受注増と新規顧客獲得を目指す。

分 類

＜対象類型＞ ものづくり技術

表面処理

材料製造プロセス

＜事業類型＞ 成長分野型(環境・エネルギー)

設備投資のみ

成 果

再生ドラム缶の主要用途である食品に対する安全意識の高まりと需要増に対応するため、外装品質の向上を目的としてスチールショットブラストの機械設備を導入し、塗装の前処理に主眼をおいた製造プロセスの再構築を実施した。その結果、塗装品質を向上させることができた。

今後は更なる従来顧客の受注増と新規顧客獲得を目指す。



展示会での営業活動



再生するために集められたドラム缶



再生ライン整形機

平成24年度

事業計画名

スチール製18リットル再生缶量産設備の能力強化

概 要

再生缶において、需要増と低コスト品に対応するためには、設備速度の限界とランニングコストが課題となっている。

そこで高機能整形金型と独自駆動プレス機械の開発に主眼をおいたラインの再構築を実施し、高速化・省力化を実現させ、低価格ニーズの新規顧客獲得を目指す。

好機逸すべからず

「ものづくり補助金」採択企業を訪ねて

久保田容器工業株式会社（松本市）

食品関係に特化し国内外の缶を再生。
資源リサイクルと環境配慮で需要高まる。

食品用に特化し缶の再生手がける

18リットル缶は、一斗缶、石油缶とも呼ばれ、石油や塗料、食品原料などを入れる古くからなじみ深い鉄製の容器。使い終わった容器は回収され、鉄として再生利用



18リットル缶の再生工程

されたり、再生缶としてリサイクルされています。

久保田容器工業は1963年、18リットル缶の再生事業で創業。後に国産および輸入のドラム缶の再生、各種スチール缶および板金プレス製品の製造を手がけ、業務用発泡スチロール容器なども扱っています。

同社の特徴は、18リットル缶、ドラム缶ともに、食品原料用途に使われた缶の再生に特化していること。そして、海外のドラム缶の再生も手がけていること。海外のドラム缶は日本製と違って板厚が薄く、サイズもまちまちで再生しづらいため、他社はほとんど行っていません。

再生缶は食品関係から産業廃棄物まで、さまざまな内容物の輸送・保管への利用が可能。価格の安さはもとより、資源リサイクルと環境への配慮に合致した商品として需要が高まっています。

集荷・配送をすべて自社の専用トラックで行う輸送力も同社の大きな強み。日本のほぼ中心にある松本の立地を活かし、4トン車6台を含む19台が全国の顧客を効率良く回っています。

再塗装の固着力を高めるために

「使用済みの缶はひとつひとつ違うため、再生



板金工程

加工の自動化が困難。人の目で見て判断するので、どうしても人の介在が多くなってしまいます」と久保田修社長。

とはいえ同社で

は、平成25年度ものづくり補助金を活用して、高機能整形金型と独自駆動プレス機械の開発に主眼を置いたラインの再構築を行い、より高速化・省力化を図り低価格ニーズに応えています。

一方、食品関連に使用されることが多い再生ドラム缶の問題は、現状のドラム缶に塗料を上塗りするため、塗膜片がはがれ食品に混入する恐れがあること。特に海外のドラム缶は塗料の品質も劣化の程度も分からず、その影響が判断できません。

同社は実際その問題に直面したことから、ものづくり補助金を活用し、ドラム缶の塗装をはがすショットブラストを導入。原缶のラベルや旧塗膜を除去し、再塗装の固着力を高めることでこの問題をクリアしました。輸入ドラム缶は板厚が薄いためブラスト時に缶が変形するなどの問題もありましたが、投射材（鉄の粒）の選定、速度の調整など実験を繰り返し最適な装置に仕上げました。



ショットブラスト



再生されたドラム缶

「陸路で日本からヨーロッパへの輸出が増えれば、再生ドラム缶の需要も高まる」。久保田社長は日本の農産物の輸出増加に期待しています。



久保田容器工業株式会社

代表 代表取締役 久保田修
創業 1963（昭和38）年3月
資本金 1,000万円 従業員数 30名
本社 松本市笹賀5960



TEL.0263-26-1232 FAX.0263-26-9036

事業内容 ドラム缶・スチール缶再生、金属製品製造、
発泡スチロール容器製造など